

前向きに生きる

渡辺通子さん



【インタビュー実施日・場所】

第1回インタビュー2023年9月28日・渡辺さんご自宅

第2回インタビュー2023年12月9日・渡辺さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類 鈴木淳弘、菊地夏凪

担当教員 鈴木敦己 実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

昭和12年、富岡町に生まれた。現在86歳。

25年間、相双地区で中学英語科の教員として活躍された。

退職後は社会教育指導員や農業で活躍された。

避難生活を経て、今は大熊町大川原地区で暮らしている。

【第1回インタビュー】

—富岡町での暮らしについて教えてください

渡辺：要するに富岡っていうのは、どっちかといったら、いわきの領分なんですね。いわき関係が、人が出入りしたり行ったり来たりしますし、買い物等もいわきのほうが多いと思います。富岡というのは、この双葉郡の中心的な位置にあるんですね。だから、県の合同庁舎というのがありまして、言うなれば官庁帰りっていうんですか、いろいろお役人さんが出たり入ったりしてましたね。

それからあとは、富岡という所は、地形的にはちょっとおかしい感じで、谷底みたいな所ですね。山と山とのほざまになりますかね。だから、今回はだいぶ震災で沈みましたね、地盤が。だから、私の実家もあった本通りも、だいぶ地盤沈下して、そこでは帰ってきて（家を）建てるということはあまり考えてないようです、皆さん。

私は小学校1年生のときに戦争（を経験して）、小学校2年の（とき）が終戦ですから、1年生は学校に行くのは行くんですが、もう授業にならないですね。それで、サイレンが鳴れば防空壕に入るとような生活で、落ち着いた生活はしませんけれど、でも学校というのは楽しい所であったという記憶はありますね。

—学校での様子について教えてください

渡辺：いろいろ覚えることもありましたがね。片仮名というのかな。先生がオルガンを弾いて、オルガンというのは、随分、珍しいものでしたね。うちら、富岡町は本当に貧しいところですから、家庭でもピアノのある家庭なんてなかったんだと思いますね。ピアノは見たことなかったですね。（子どもたちは）学校のオルガンを触りたくて触りたくて仕方がないけど、（先生は）触らせられない。そんな時代です。ともかく学校は楽しい所だけでも、あんまり。

楽しいといえば、たくさん子どもたちがいるから楽しいんであって、別に楽しいいろいろな遊具があったとか、そういうことはないと思います。だから、友達がいるということが学校は楽しいところなんでしょうね。今はその友達付き合いが嫌だという子もいるけど。昔は楽しかったですね。遊び場がないんだけど、自分たちで工夫して遊んでたというのは今と違うと思いますね。いろいろ遊び道具を自分たちで作るんですよ。

—どんな遊びをされていたのか教えてください

渡辺：街の中で電信柱が立っていると、その「電信柱くれ」とか言ってね。鬼になった人があそこの電信って指さすと、みんなあそこの電信まで行かなきゃなんないんですが、行こうとしているうちに鬼に捕まって自分が鬼になるというのを「電信柱くれ」とか言ってね。そういうのはとても、街の中で遊べた。うちの中で遊ぶということはあるんですよ。外で遊ぶ。日曜日になったら、みんな外で缶蹴りとか、ビー玉とか、女の子は縁側でおはじきなんかをやったかな。そんなことですね。遊び方が今と違うということですね。

あとは、一番、私が面白いなと思ったのは、昔は、この近海でホッキガイが採れるんですよ。たくさ

採れたですね、ホッキガイ。そのホッキガイがとてもいっぱい積もってますね。そして、そのホッキガイの（貝殻の）山の所に穴を開けて縄を通して、（それを）二つ作るんです。二つを結ぶんです、縄で。そして、パカパカ、裸足になって歩くんですね。あれはちょっと面白い遊びだなと思いましたね。駆けっこしようとかいってね。ああいうのはとても子どもらしい発想だなあと思いましたね。

全然、プールというプールなし。町ごとに川はありますわね。富岡にも大川という川があるんですよ。名前は大川っていう、川が一番大きいから大川なんでしょうね。そこで水泳ぎをしましたね。大川の川下が海ですから、すぐね。そして、日曜日の休みや夏休みなんかは毎日のように海に行きました。お弁当を持って、キュウリやトマトを持って。そして、キュウリ、トマトは水に浸しておいて、そしておにぎりは必ず梅干しを入れてないと腐っちゃうから。そんなことが記憶にありますね。行くときは勇んで行くんですが、帰りは嫌だなあ、帰りたくないな。疲れちゃってね。

一山側である大川原で暮らすことに対する当時の印象を教えてください

渡辺：私は生まれってというか、運動神経はあんまりないほうだから、海よりは山のほうが本当は好きだった。山歩きは好きです。昔は燃料というのは炭か薪だったですよ。そうすると、お風呂も全部、そういうもので沸かしましたからね。そうすると、子どもたちが、薪っていうんですか、燃料になる薪とか、『ごんのごんの』なんて言ってたんですが、松っぱですね。そういうのを籠に詰めて、そして採ってくるのが日曜日の仕事だったんです、子どものね。だから、お風呂沸かしも子どもの仕事。それから、そういうふうな燃料を採ってくるのも子どもの仕事。そういうので山に行くことが多かったですよ。そうすると山にはいろいろありますから、栗もあり、キノコもあり。そういう山が好きだったんです。

あと、私は母子家庭で父親が早く亡くなったので、だから結局は経済的に大変だったというような環境ですね。できるだけということで、母はもともと農家の出身でしたから畑をやってたんですね。ジャガイモを作ったり、サツマイモを作ったり、いろいろな野菜を作っては、それを糧にしていたわけですね。商売もしましたが、商売といっても売るものがないんです、当時は。だから、店は開けてても、なかなか経済的に大変で、畑で採れたものを食料にしていた。そして、畑仕事を手伝うのが、私は好きだったし、嫌いではなかったんですね。だから、畑に母親と一緒に自転車の後ろに乗って行ったんですね。あと、草取りなんかも嫌いではなかったですね。姉なんかは嫌いだと言っていた。兄弟でも違うんですね。私はコツコツやるっていうか、細かにやるっていうか、そういう性格なんでしょうね。だから縁があってね、やっぱり。あとは、一番下だったんですねうちは3人きょうだいで、兄が跡を商売を継いで、姉は銀行に勤めて、それで経済的に楽になったんで、おまえは大学に行きたいんならやると言われて大学に行きました。それは感謝です、末っ子に生まれて。

一教師時代のことを教えてください

渡辺：あの時代（私が就職した時期）は、サラリーマンというのが皆さん憧れでした。それで会社勤め。それで、私も一回、会社は受けましたが、不合格だったんですね。不合格で、結局は私は向きじゃないんだなと思って、仕方がない、田舎へ帰ろうと思って、田舎に行くのには何がいいかといったら、やっぱり先生というかね。あの頃は先生なんてあんまり希望者がいなかった。今のよう状況になかなかない。

あの頃の先生は『でもしか先生』って言われたんです。先生にでもなろうかなとか、先生にしかねない。『でもしか先生』、私はその1人です。

そんなことで田舎の学校に、地元に来たんですね。それで相馬と双葉郡と、双葉が管内ですが、管外に行かなきゃなんない義務と、それからへき地っていうの。へき地の学校（へ行くこと）、これは義務だったんです。赴任するのがね。それで川内も2回行きました。みんな行きたがらないわけですね。でも川内はとってもいいとこでしたね。だから2回行きました。あと相馬、原町も行ったかな。あとは、この双葉郡で終わりましたね。

大学を出て、こっち戻ってきて先生で、一番最初の赴任校は原町第一小学校です。2年いました。本当に先生というのは大変だと私は思うんです、今でもね。要するに、学校をすぐ出て教壇に立つんですもんね、実習期間はありますけど。そんなのは何も役に立たない。すぐ現場に立つ、教壇だから大変ですよ。サラリーマンも大変かな（と思いますけど）。だから、自分は駄目だ、駄目だ、先生に向いてないという思いでいました。最初に担任を持たされて、それで教科、2科目、持たされたんですよ。ああいう残酷なことをやるんですよ。英語だけなんていうのはないんです。中学校っていうのは、そういう、専任教師なんだけど、その他に時間のコマのやり具合で、2教科とか3教科持たされた。時間数の少ない人はね。

例えば一つの学校に英語の先生が3人いたとしましょう。そうすると、原町では1学年が8クラスあったんですね。そうすると24だから、1人で8クラス全部は持てませんでしょう。そうすると2クラス余っちゃうわけね。余った分をもう一人の英語の先生に当てるわけですよ。ひがみかもしれないけど、それが新任に回ってくるんですね。だから、やり切れなかったです。そんな苦しいのは、弁解かもしれないですが、私は教師向きでないと自分で思っていました。図工の先生もやりましたし、国語の先生もやりましたし、そういうのだったんですよ、昔は。それから、国語もやったし、社会やったでしょう、最初にね。一番つらかったのは図工ですね。分かんないんだもん。できないんだもん。できないことをやれって言われるのは一番つらいね。子どもらにも申し訳ないっていう気持ちが先に立っちゃうのよ。

そんな教育界でしたね。子どもが多い時代だったから。多いんですよ。8クラス、7クラス、私ら富岡でも4クラスあったですよ。A、B、Cって言いました。私らのときは（1クラス）40人、50人近く入って、ぎゅうぎゅう詰めですから。そんな時代ですよ。でも楽しかったんだね、不思議で。ぜいたくできるから幸せっていうことでもないのかなと思ったりしますけど。原町第一中の後は川内。ほんで、へき地教育。2年間いました。あんまり歩き過ぎた。それも悪い癖だと思ってます。あとは、次は双葉。双葉中学校に8年ぐらいいましたね。反省からね。あんまりちょこちょこ動いてたんではうまくないなと思って、8年。居心地がよかったから。あの頃の生徒は、まだ校内暴力、校内何とかと、荒れてなかったからね。後ですよ、荒れたのは。

一大川原にお嫁に来てからの生活について教えてください

渡辺：もっと早く結婚すればよかったと思って。というのは、息子が生まれたのは30ですから、30の年だと、彼が会社勤めして定年になるのが60でしょう。そうすると私は90でしょう。ちょっと遅過ぎるよね。90で、定年まで私も何とか頑張んなきゃなんないと思って。人生設計が間違った。考えなさ過ぎた。結婚で相手が農業だということ家族には反対されたんですが、だけど私は何となく土というのが好きだったんですね。お勤めしながらも農業というものをやってみたい。だから、なんて不思議な話

だけど、通用したんですね。

ここが田植えですよっていうと、お祭り騒ぎですから人が集まるんですよ。今はトラクターで1人でやっちゃいますけど、(昔は)みんな手植えですから。そうすると、みんな手伝いをお願いして来てもらうんですよ、20~30人。15人、20人ぐらい来ますね。そうすると、賄いやら何やら大変なんですよ。そうすると、私は勤めをやっているどころじゃないんですよ。きょうはうちで田植えですから年休いただきますって言うてもらって。今、考えると、変な話なんだけどね。有給休暇というのがありますから、教員はね。公務員はね。そんなことをしながら、田んぼを手伝いましたね。

でも駄目ですね。農業は農業なり、小さいときから土をやってきて、本当に農業というものに就くのに途中からやっては本職になれないなあというのが今の感想です。途中から農業らしいことをやってきたけど。牛も飼いましたし。牛も飼って、競りにも連れていったことがあります。牛は簡単ですよ。あんなおっきな体だけど、鼻かんを押さえると、牛は簡単にその人の言うように付いてきます。そんな経験をしました。

—暮らしの変化で不便を感じたことについて教えてください

渡辺：私は、そういうふうな都会的なことを求めないからね。派手な衣装を着て買い物に行くとか、お芝居、舞台を見に行くとかね。そういうもの、あればいいんだけど、それを極力求めるたちはない。だから性格だと思うよ、私は。自分の中で満足できるものがあれば、環境はどうあれよしとすると。そういうふうなたちなんでしょうね。性格なんでしょうね。自己満足できるというか、欲があんまり深くないのかな。でも、だから駄目なんだね。もっと欲があっていい、一回しかない人生だもの。そう思わないですか。だから、あなたは私の生き方を不思議に思うんでしょう。私は思うんだけど、自分で選択した道だと思えば、あんまり不満は感じないです。誰かに勧められてきたんでは「何もないじゃない」とか不満も出てくるけど、自分で選択した、自分で決心したというところは自己責任もあるからね。不平不満は言わないようにと心がけていましたね。

—観音講について教えてください

渡辺：観音講というのは、ここの土地の女性の女性会みたいなもんですね。女の人たち、ここに来たらば、何ていうのかな。だけど、ここも封建的な時代ですからね。家柄というのをとても問題にするんです。誰も彼でも入れるかっていうとそうでなくて、ある程度の格式があるうちの女主人が入るというような講だったんですよ。

要するにどこでもあるらしいよ、この講というのは、昔から。聞いたことないですか、講。いわきのほうにももちろん講、観音講、無尽講というのはあるんですよ。漢字で書けば講義の『講』、ごんべんへの。これは、言うなれば女性の経済的な自立というかな、無尽講みたいなもんですよ。要するに昔は現金というのはとても貴重なもので、女の人はいり物したくても買物できないし、したかったら旦那からもらうしかないわけでしょう。そのときに、自分の買いたいものを自分のお金で買うという方法を考えたのかなあと思うんですけど、その講をここで女の人たちは一つの楽しみ会として会をつくって、そのときにある小さなお金を、みんな同額を持ち寄るんですよ。それをプールするわけ。そうすると、自

分で買えないような高価なものも、そのプールすることによって、今月は私がもらう役、順番にもらっていくわけです。そうすると高額な金をたまたま、10人いれば、10回目のあるときに自分がもらえるわけです。そして欲しかったものが買えるというようなことも、仕組みでもあったのかなあと私は思うんですが。

その講を、まず最初にそういうことがベースにあって組織したでしょう。その組織が始まって出来上がった講を、今度はいろいろに活用していったんですね。まずやったことは、ここに嫁に来た人たちを孤立化させないという意味で、なるべくこの土地柄にはなじんでもらいたまおうということ、お嫁さんに来たら、そのお姑さんは引退してお嫁さんを出すと。そういうことをやったんですね。それは立派だなどと思って。そうすると、お嫁さんは、ただ毎日毎日、野良仕事で疲れ切っているときに、年に1回か2回は休みで、農作業なしで、おいしいものを食べて、そしてそういう楽しい楽しい1日を過ごせたんですね。

あともう一つは、お嫁さんには子どもができますよね。そうすると、子どもを連れて出ることと。孫でもいいんですが、子どももいらっしやいらっしやいとなるわけ。そして、子どもたちを健全に安全に育てようという女性としては当然の願いを込めて、それであそこに神社があるんですよ。^{おおやまづみ}大山祇神社という神社がありまして、そこに集まったら、子どもも連れて、そしてお嫁さんももちろん、赤ちゃんをおぶったりもして、そして年寄りも含めて、年寄りはお嫁さんがいなければ自分が出るわけですから、そしてみんなで行列を組んでお参りするんです。

そのときに、考えたなあと思うのは、子どもたちを交通事故、あんまり今みたいに車はないから交通事故はないんだらうけど、子どもたちがちょろちょろして危ないから、大旗を作ったんですよ。(観音講が)結成されたのは、この旗ができる前だと思うんですよ。一番古い旗は明治27年というのがあるんですよ。だから、ひょっとしたら江戸時代末期の頃かなあなんでも思ったりも。この旗を手作りしたんですよ。昔はミシンなんていうのはありません。なんでこれを出したかということ、ここにさおを通すんですよ。さおを通すでしょう。そして、のぼり旗なんです、この旗を横にして子どもたちにつかまらせんですよ。これは、この観音講のメンバーが輪番に宿主になるんです。会長とか、その1人だけ決めないで、宿主になった人がこれを保管するという。旗はもちろんですが、皆さんに見せたいんですが、これは持ち出し禁止なので。次回、今度の10月の17日に観音講あるんですが、その(ときの)宿主さんが持っている控え帳という、記入帳というか、記録帳というのがあるんですよ。100年以上ですから。その記録簿がまた面白いというか、珍しいというか。でも、棒も、本当に震災の避難している間に預かってた人はどんな思いだったかと思って、やっぱり責任を感じますよ。

震災後、(観音講を)再開してから、4回目になりますね。今度の会は、ちょっと講師を頼んでるんですよ。この村のことを詳しい人がいる。その人に講師を頼むから、この旗を見せて参考にしてもらおうと思って。それで、これについての質問が一つあるんですが、これを現代の、時代が変わってしまったし、子どもはいないし、それからお嫁さんも来ないし、それからそういうふうな時代になったときに、この講を存続させる意味があるかないか聞きたいのね。たまたまこういう財産があるから続けなきゃなんないという思いで、また再開したいんですが、でもこういう会を現代の人は面倒くさがる。会場、行くのはいいんだけど、自分が責任者になることが。そうすると、そういう負担を考えて、続ける意味は何だろうかなど。何に求めていったらいいんだらうかなと。

—観音講の集まりの頻度について教えてください

渡辺：今、集まる頻度は、縁日というかな、この縁日、昔から決めてあるんですが、3月の17日か、10月の17日か、昔は2回やってたんですよね。だけど今は2回なんてとんでもないと。準備が大変だと。お客さんを迎えること自体が大変だからね。だから年に1回にしてんですが、今度は春じゃなくて秋の10月17日。あそこ（に観世音という）石塔が建ってるんですよ。そこに日にちが書いてあるんですよ、10月17日と。何の日なんだか、それが分からないんですよ。調べてるんですが、なかなか正しい答えがまだ分かってない。そんな理解なんですけど、どうでしょうね。

とてもお客さんを迎えるということは大変だなあとということで、それで今言ったように、何の意味があるんだろうなど。大変な思いしてね。また帰ってこない会員もいるんですよ。その人たちは、私の家で（宿主を）2回やったんですが、今度はうちに来て（集まりが）、あるからね。（帰ってこない会員の）代わりに場所を（用意するために）、じゃあうちでやりましょうということで私がやったんですが。まだ今、隣と、それこそその向こう（の家）と、今、建築中ですね。帰ってくる予定でいたら、私は抜けませんとは言ってますが、今、会員は6人しかいないんです。入っている、続けていくという人は6人しかいないんですよ。昔は何十人といってたんですけどね。そんなに会員が少なくて何の意味があるの、どうすればいい、これからと思っているんです。これ消してしまうのもね。（大旗に、インタビューの）皆さんがびっくりして、ちょっと感動の声を上げたようなところを見ると、何か意味があんのかなと思って。

—教師になろうと思ったきっかけについて教えてください

渡辺：なんでかなあ、なんでかなあって、自分ではっきりした、本当言うと『でもしか先生』なんですが、会社に入りたいけれども、落とされたので入れなかった。だから、田舎に帰ろうと思ったんですが、田舎も嫌いじゃなかったから。あと、自分としては教えるということ、今の学生は分からんけど、教科を教えるということは嫌いじゃなかったね、人に教えるというのは。というのは、私は40人、50人のクラスの中で、結構、成績がよかったんですよ。なもんだから、前後の男の子たちが「連立方程式やら教えろ」、言われて教えたのが、後の同級会のときに、おまえに教わったななんていう話になって、教えるというのは、それは自分にとっては自信にもなるわけ、教えるということは嫌いじゃなかったと私は思いますけれど、そんなことかな。別に高いものを持ってなったわけじゃないです。

—英語教師を選んだ理由について教えてください

渡辺：私が中学校のときの先生は、進駐軍って基地があるでしょう、アメリカ人たちがおってね。そこで働いてた人らしいのね。それで昔は英語の教員の免許を持っている資格者なんて少なかったからね。専門に受けたっていう。戦時中は英語なんていうのは、英語なんてっていう、そんなぐらいであって、敵国の言語だから。だから、今のようないくつでもしゃべれる、それから英語が堪能な人なんてはいないけど、私が習った中学校の先生は、ともかく発音がきれいだなと思ったんですよ。それぐらいかな。いいかげんだったですね、言うなれば。だから、私たちはこんな田舎のどこだから、英語のえの字も分からないですよ。Lのことを「いろいろ」なんて言って、「いろいろ」なんて発音して笑われたことがある。そのぐ

らいの話で、そんなもんですね。

それから、興味を持つことが、その人が好きになるというかな、一つの選択のきっかけにもなりますよね、と思いますね。好きなことが、好きということがとても大切なことですよね。嫌なことは長続きしないと思う。だから高校に行っても、英語の先生がハンサムだったの。

一東京電力関係者の子どもと関わる上で気を付けていたことについて教えてください

渡辺：そういうテクニックというのはあんまり長けてなかったというか、工夫が足りなかったかな。今言ったように、できないな、できないな、何とか先生教えてとか言われれば教えるぐらいでね。こうやってクラス全体でお互いに助け合って、その力を付けていきましょうなんていうところまではできなかったと思いますけれど、やる価値はあるわね。学力を上げるに一对一でよりはね。みんなを活用して学力を上げていくというか、落ちこぼれを救っていくというのはあると思いますけどね。

一原子力発電所が完成したときの地域住民の思いについて教えてください

渡辺：私は在来種でしょう。結局は東電関係の人たちはよその人たちね。ちょっと人種的に違うなと思っ
ているときに、次々と東京電力関係の恩恵を受けるようになってきたんですね。いっぱい色々な器もできた、建物もできてたし、それから色々なイベントをやれば援助もあるし、だから東京電力なしで、どう
いうふうに変わっちゃうんだらうなあとと思ってね。それは地元の間人としては心配しましたね。本来、自
分らで、貧しくても、つましく、昔からのやり方で、工夫して生活を立てていく道もあったんじゃないか
なとは今思いますけど、それは時代の流れだから、東京電力の恩恵は受け入れてもいいかなと思います
けど、ちょっと大熊の人は努力が足りないような気がいたしますね。あまりにも恵まれ過ぎましたね。

そして、被災後も恵まれていますから。宝くじに当たったなんて言うぐらいの人もいましたからね。
だから、これがいいことなのか、幸せにつながんのか、それは分かりませんね。だから、私は思うんです
が、自分の足で立って生活していくという心構えはいつでも必要じゃないかな。自分の好きなことでや
れるのはいいことだと思いますけどね。

一原子力発電所の建設後、原子力発電に関する教育はされましたか？

渡辺：（私が教壇に立っていた昭和 60 年代には）ほとんどしません。安全とか、原発はこんなものだと
か、未来にどうかこうとか、そういうことは一切、教室ではありません。

ただ、最初はみんな危険なものと思っていたんですよ。知らないが故に危険というのはありますけれ
どね。知らないんですよ。だから、学校では教えませんね。原発の、原子力発電所のいろんなことにつ
いては語ったことありません。恩恵は受けてても。

だから、原子力発電所の事故が起こって初めて、いろいろな知識が身に付いたような気がしますね。安
全を主張したいわけですから。大丈夫なんだよ、大丈夫なんだよということを言い続けてきたわけです
よ。あるときには隠し事まで知ってまでも、安全を強調してきてましたね。そういうふうに見てきたか
ら、だから（原子）爆弾と（同じように）は話しませんね。教室で語ったことはありませんね。私も社会

的な知識はあんまりなかったから話せなかった。

—原子力発電所のサービスセンターで伝えられていた内容について教えてください

渡辺：炉がどんな仕組みになっているのか、模型がありました。それから、映写もありましたね。核の芯、燃料棒なんか入れたのが見れたね。そういうのを一般の人に啓蒙してたんだと思いますけどね。あと、色々な展示会、地元の人の絵画なんかの展示会があったり、イベントの場所でもあるし、また子どもたちを遊ばせる動物園みたいなあって、うちの嫁なんかは子どもを連れてよく行きましたね。あとは、そんなふうにサービスセンターだからね。東京電力というのはいいい所だよとサービスするんでしょうね。

それで(自宅に)お客さんが来たときも、原発の中には入れませんから。あそこが原発なのよと行って、(サービスセンターにお客さんを)案内したこともあります。あと、海がよく見晴らせる人工的な山があるね。景観がいいとこね。あんなところにも案内したことがありますね。

—原子力発電所での事故以前に防災の意識はあったのか教えてください

渡辺：災害を受ける前に防災というのは考えてなかったんですよ。安全神話が浸透してたから。まさかと思ったんですよ。だから町でも、(東京電力での)事故が起きたときに、どうしたらいいか対処方法はなかったんじゃないですか、最初。そんな状態でしたね。まさかという事故だったですよ。事故だとか自然災害なのか、どっちだか分からない。

—地震が起こった際の様子について教えてください。

渡辺：これはもう、とてもじゃないけど大きかったです。ともかく大きかったですね。経験したことないというのはもちろんですけどね。止まらないんですもんね、いつまでたっても。普通だったら、がたがたときで、それで終わりなんですけど。それからまた余震も、一晩中ですからね。30秒置きぐらいに。寒いときだからね。寒くて寒くて仕方がない。布団をいくらかけても、熱がないから駄目だったね。だから、石油ストーブというのをつけたんですけど、また石油ストーブで倒れたら大変だと思って、がたとききたら止めて、つけたり止めて、一晩、過ごしましたね。ある人は外で過ごしたって言わない？うちの中にいれなくて。

うちは築、江戸時代の末期ですから、260年ぐらいたってんですよ。母屋は、ここはまだたたない、そんなにはたってないですが、ここで昔、工場、工場造りなんですけど、これも倒れなかったのが不思議だね。倒れなかったですね。あんなおっきな地震で倒れなかったから、あとは倒れねえどなんて笑ってるんですが。でもやっぱり怖い。地震は怖い。どうしましょう。目が見えないから、なお怖い。逃げるに逃げられない。

—避難生活について教えてください。

渡辺：要するに次の朝に、息子がいたんですが、息子は浪江の会社に勤めてたんですが、彼は彼で会社の

ことで頭がいっぱいなんですね。盛んに社員の安否を確認しているんですよ。何だろう、この子はと思ったね。家族の心配・・・と思ったんですが。そして町の消防団にも入ってたんですね。ともかく6時に全員、消防団は町に集合という集合がかかってたんですね。そしてアナウンスも、微量の放射能がちょっと飛散したというような、微量という言葉がやたら残っているんですよ。だから、町でもよく、どのぐらいのものが分からなかったんだわね。それで6時に行って説明を聞いてきたんですよ、息子が。

そうすると今度は避難だと言うわけですよ。だから、差し当たりともかく必要なものって、本当に必要なもの以外は持たなくてもいいからということで。だから、うちでなんかは晩酌用の2000円、ここに入れてね。明日か明後日帰ってくるつもりだったんですね。分からないんですよ、どの程度のものかね。そして、そこに集会所があって、そこに集合しなさいという指示だったんですよ。ともかく避難指示です。避難しなきゃ駄目だというわけですよ。

そして、ここは結局は放射能があんまり高くなく、流れが風向きで低かったんでしょうね。それと、へき地でもあるし。だから、バスが来るから、そこで待っているようにというような指示があっても、待てど暮らせどなかなか来ないんですよ。それで、自家用車でさっさと行った人ももちろんたくさんいます。そして、待ってたんですね。そしたら、大川原は線量はそんなに高くないので、最終のバスだったと言っていました。なんか茨城のほうのバスでしたね。だから、町では避難用のバスを手配するのに、とっても大変な思いをしたんじゃないでしょうかね。

そして、ここを出発したのは(お昼の)12時ですね。ちょうど6時間かかっているわけです、朝から。指示命令が出てからね。そういうふうにして、てんやわんやの状況でしたよ。郡山に抜ける道があるんですが、そこをずっとバスで、ものすごい交通ラッシュですよ。それで、どこに行くんだべなあって、みんなバスの中で旅行しているみたいなにぎやかな感じだったんですね。それで、行けども行けども、ここ(の避難所)も入ってる、ここも入ってるって。それで、岩江の中学校が空いてたんですね。そこに下りて、それから避難生活が始まって、いつ帰るか分からないとなって。

そこで爆発したって、水素爆発。そのニュースを聞いて、こんなに大変なことになったんだよと思って。年寄りを1人(お姑さん)、抱えてましたんでね、施設に入れてましたから。どこに行っちゃったんだろう、そればかりが心配で心配で。電話もかけられねえ、携帯ももちろん持ってなかったですから。それが心配でしたね。尋ねるところがないんですもんね。田舎だからでしたね。それで電話をかけたりして、でもつながらないんだけど、母(お姑さん)が入ってた施設が、その双葉病院の近くの老人ホームに入ってたんですが、そこは単独で避難したんですね。だから、施設は施設で単独で避難して、とっても大変な思いした人もいるし、うちの母(お姑さん)も要するにバスに乗って避難して、二本松市の奥の老人ホームみたいな所に、急ぎよ、仮にいさせてもらったんですね。そこに入って、その施設の職員さんは付きっきりだったらいいですよ、うちに帰らないでね。それで電話が来たんです。「渡辺さんの家族の方ですか」って言うから、「そうですよ」と言ったら、今、ここで預かってますから迎えに来てください(と言うから)びっくりして行ったでしょう。そしたら、もう寒いのに、こういう板敷きの上にごろごろしてんのね、みんな。布団も何もないのね。こんな所に置けないなと思って私たちは引き取ったんですが。

その前には二本松のアパートに入ったです。ある人が世話してくれてね。二本松のアパートあるから、そこに行ったほうがいいって言うんで、岩江中学校には、1週間ぐらいいましたけどね。息子はもう帰ってきませんでしたよ。消防の関係で。出たっきりです。息子は、それから会社を再建するというで奔

走してたんですね。日立関係の会社だったんですね。子会社ですけど。それを浪江から移す手続き等に奔走してたみたいですね。帰ってこなかったですね。だけど、孫がいたから。孫は大阪に行ったでさ。母親が大阪出身だから。ちょうど福島空港からチケット取れたんですね、飛行機。避難に2日か3日かな、岩江中学校にいたのは。それで、チケット取れたからといって。運がよかったんですね。それから、あとずっとあっちで大学まで。大阪で。上の子は就職して、下の子は今度、4年生かな、分かんない。若いのは来ないですよ、ここに。

—今後教育する側として、東日本大震災や原子力発電所問題について、子どもたちにどのように伝えていきたいと思いますか。

渡辺：どういうふうに伝えていくかな。要するに、今、言ったように、情報そのものが本当に信じられるものだったら安心なんですよ。ところが、いろんな情報が飛び交うでしょう。そのとき、教える立場で、どういうふうにして生徒たちに言ったらいいのか分からない。また家庭に行けば、家庭でお父さん、お母さんの話があるでしょう。そうすると、子どもたちは訳分かんないでマスクしているとか、そういう状況になるんですよ。誰かの指示に従ってやっているだけだね。そうすると自分の判断力で、マスクなんて要らねえだとか、そういう判断ができないわけよ、子どもはね。だから、難しいね、今の質問は。私はできません。(ただ)うちの孫には言いたいね。あんまりびくびくして、自分のやりたいこともやらないでは損するよとかって。

【第2回インタビュー】

一通子さんが観音講でもらったお金で何を買ったのかを教えてください

渡辺：今現在はお金を出して、プールして買い物をする、そういうふうなことはやっていません。皆さんそれぞれにお金持ちですのでその必要はないという時代になっています。(しかし)昔はそれが必要だったから。女性はお財布をなかなか持てない立場でしたから。だから昔のことで、今はやっていませんから、私は別に買い物はしません。私(が観音講に)入ったときも無尽講はありませんでした。私(が観音講に入ったのは)戦後ですもの。(観音講でお金を出し合って買い物をしていたのは)戦前から戦中にかけてだと思いますよ。そういう経済的な自由が利かなかったのは。あとは大体豊かになりました、日本も。戦後の貧しいのは食糧難ぐらいのときですよ。

でも、姑がやっていた(観音講でもらったお金で買い物をしていた)のは見たことが1、2回ありますね。その時の姑は何を買ったのかしら。それはちょっと記憶にはないですね。(私が観音講に入ったときは)もう子どもたちもおっきくなってたしね。そういう無尽講がなくなってきたっていう時代が来たということですね。

一観音講で相談したことを教えてください

渡辺：家族に恵まれてたから、そんなに不平不満っていうか、困ったっていうことはなかったですし、私は勤めてたしね。だから、あまり家庭的なトラブルっていうか、朝から晩まで一緒に働いていたら確かにいろいろな摩擦があったと思いますけど。どこのうちもありますよね。今だってあると思うんですが。要するに(私は)日中はいなかったし、それから、子どもはお姑夫婦に見てもらっていたし。だからそういう意味では、おかげさまという気持ちで働いてました。

一どんな気持ちで観音講に参加されていたのかを教えてください。

渡辺：観音講っていうのは、嫁さんをもったら嫁さんに譲るとというのが姑だったんですよ。だけど、私の場合は勤めてたのでね。だから、当分の間はお姑さんに続けてもらっていたということなんですよ。

というのは、農家に嫁いだ人は楽しみっていうのはなかなかなかったんですよ。労働が激しいですから。みんな手作業ですから。現代のような機械なんていうのはない時代ですからね。だから時間は、明るくなったら夜暗くなるまで労働、労働だったと思いますよ。それで、大変なお嫁さんを早く地域の人たちに仲間入りさせてやりたいという願いで観音講では、姑さんは脱会して新しいお母さんを早くなじませてあげましょうという地域の考えもあってね。

だから、嫁いできたらすぐどうぞどうぞということですが、私の場合は仕事があるからそれはちょっとご遠慮して、姑に「当分の間ごめんね」っていうことで。また姑も喜んでましたので、自分が出られるっていうのは。女の人の楽しみ場ですから。おしゃべり場、楽しみ場、ごちそうを食べられる場。そういうことで姑は喜んで私の代わりに出てくれましたね。だから、(私が観音講に入ったのは)子どもがもう抱っこするなんていう時代ではないですね。もう学校に上がって、それで(手が)かからな

いような状態になったときだと思いますけれどね。

それで、一時、この観音講も、この前言ったように、なんの意味があんのかしら。こういう時代が変わって、もうお金も皆さん、女性は独立できたし、自立できたし。それでなおかつ、だんだん派手になりましたね。その飲み食いが派手になりました。そして宿をする人がもう大変。準備が大変だっていう思いになったんですよ。20人、30人の賄いをしなきゃなんないものですから、何日も前からそのことが頭にあってとても大変だったんですね。それでもう1抜け2抜けし始まってたんで、それでやめようっていうところまで声が掛かったんです。そのときに、観音講の財産があるので、それをどうしようとなったときに、これをみんなで分けるわけにはいかないからね。だから、ともかく3人でも5人でも私たちはそれを守っていくという有志が出てきたので、分解しないで、壊れないで、やめないで、5、6人でまた再出発したんですね。そういう時期があったんです。だから今、続いているんですが。継続するっちゃうことは、やっぱり時代が変動してるからなお大変だったと思います。それを守り抜いたっちゃうこともまた私にとっては意義があることかなということですね。

—講を続けていく上でここだけは守っていききたいと思う伝統について教えてください

渡辺：観音講の軸をシンボルにした、地域の、隣近所の、会員の親睦、絆、それは守っていききたいなというように思いはありますね。だから、来る者がいけば大歓迎なんですけど、去る人ができたら寂しいだろうなどは思います。今、例えば、意味があるのかな、絆になるかなとか、1年1回の皆さんとのおしゃべりが楽しいひとときになるかなというのはちょっと不安ですけど、皆さんが嫌って言わない限りは続ける意味があるかなと。

—観音講の集会以外での会員の方々との関わりについて教えてください。

渡辺：あんまり用事がなきゃ会わないですね。田舎ってそうですよ。隣と隣があまりにも距離がありますから、何かがあって「こんにちは。来ました」「お茶でも飲んでいって」なんつったって、なかなか主婦の人は時間的な余裕がないからね。観音講というのは朝から来て1日過ごすということだから、気持ちの上でも、時間的な意味でもゆっくりできるというのはめったにないお話をする機会かなとは私は見えますけれど。

年に1回しかお会いしない方も何人かいますね。いますねって（言っても）、今のところは6人しかいないからね。（大川原に）帰ってこない人もいますしね。だから、年に1回は必ず皆さん喜んで来るから、必ず会って近況を話し合いますね。（震災で）こんなに人が離ればなれになったから、そういう意味ではなおこの機会を持つことは意味あるかなと再認識しましたね。

—10月17日の観音講に参加して感じたことを教えてください。

渡辺：そうですね。そのとき（10月17日）も皆さん喜んで集まる。全ての都合をつけて集まったっていう感じですのでね。遠くからですから。三春辺りから来ますからね。だから、暗くならないうちに終われるようにとか、そういう気遣いをしながらね。朝、あんまり早く出掛けなくてもいいようにというように

ことも考えながら始めて締める、そんなことは考えますね。

あと、ここの鎮守の神様って昔から、村にはそういう神様があって、お盆のときなんかは、盆踊りなんかはそういう場所としてありますよね。それがあそこの山の神様なんですけど、そこに、1年に1回お参りしたっていう気持ちの安堵感っていうんですかね、それはちょっと今年感じました。年齢のせいだと思いますけど。村を守ってくれる神様にみんなでお参りしたと、そういうことにとっても心の安堵感が持てたっていうのは、今回初めて感じました。

一原子力発電所が建設される前の段階で、原子力発電所の建設について どう考えていたのか教えてください。

渡辺：反対でも賛成でもないですね、実情は。ただ、大きな経済的な効果のある事業が来るということには反対はしないわけですよ。ただ、原発の怖さなんていうのは何も知らなかったし。だから、町としては誘致を歓迎してた。行政の人たちはね。また、東電のほうも、土地の交渉に当たるとかいう人たちは地元の人たちだったと思いますよ。だから、有利な点だとか、そういうことを聞いているから、別に反対という気持ちはありませんでした。(原発について)知らないから反対しようがないですね。

一原子力発電所が建設される前の段階で、 原発を原爆と結びつけて考えることはありましたか。

渡辺：そうですね。今、考えてみればそういうのは当たり前話なんです。原爆の怖さはもう嫌というほど聞いたり見たりしてるわけだから。ただ、危険なものであるということだけは何となくは感じましたけどね。そこ(原爆)に結び付けてはいたかなあ。

でも平和利用ということだったからね。兵器とは違って平和利用だから、危険なものを扱う上で十分なる対処をしてるっていうのかな。近寄らなければ大丈夫なんだというように(感じていました)。(しかし)初めの頃は、安全だとか、大丈夫だとか、そういうのはあんまり(誇張されていなかった)。ある程度は言っていましたけども。あの頃は何て思ったんだろうね、私は。あんまり関心がなかったような気もするけれども。

ともかく安全だよ、安心だよというのはだんだん声高になって。初めは近寄らなかったですよ。柵で全部囲っていたから。構内にもね。それがだんだん緩やかになって、最終的には炉の上まで見学させてくれたですもんね。だから、あの頃はもう安全なんだなというような神話が出来上がってきていたし、地元の人はもちろん東電に依存してて、案外いい思いをしてたしね。出稼ぎもしなくてもいいし。

だから、(原発自体は)いいもんだなとは思わなかったけれども、町としては(東電関係の恩恵は)いいものなんだなという思いはありましたね。うちでも出稼ぎをやりましたけど、出稼ぎなんかはやらなくてもいいと、どこのお父さんも。そういう時代、経済的な効果はあったと思います。職場がありましたから。(原子力発電所建設中は)一時的に町は繁栄しましたね。いろいろ作業員も入ってきたし。それから、泊まる所もないぐらい。宿泊所というんですか、宿屋さんというんですかね、昔の宿屋さん。ホテルまではいかないけど。所狭しと繁盛してましたね。だけどだんだん作業が少なくなってきた。(原子力発電所が)完成してきた頃はね。それから中心部で働く人たちだけのことになったから、今度は地元の人も職場っていうのが少なくなってきたし、町の景気もいまいち、お店もいまいちになりましたね。大体想

像はできるでしょ。ただ、一番残念に思うのは、安全だ安全だっていう神話を信じ過ぎてたという感じですね。その結果の厳しさを今、嫌というほど知りました。

―出稼ぎについて教えてください

渡辺：うちの夫ですね。生活に困ってということではないんですが、要するに農作業というのはそんなに労働が要らなくなってきたんですね、機械化されて。だから、植え付けにしろ、刈り取りにしろ、そんなに人に支払うような状況でないんですね。機械には支払われますけど。そうすると経済的にも、農業だけでは食っていけないのは確かなんですが、でも、時間的な余裕があるから、経済を助けるという意味だかどうか分かりませんが、出稼ぎはしたことがあります。2年ぐらいかな。少ない（期間）ですね。よその人はもっと出稼ぎには行ってた人もいますけど。ただ、農業だけでは食っていけないというのが現実でした。

―原子力の平和利用についての考えを教えてください

渡辺：要するに、エネルギー源である原子力というのかな、それを兵器でなくて、私たちの生活を豊かにするために使うんだというような、使い方の違いだと思いますけどね。人を殺すための兵器とするか、生活を豊かに、経済を豊かにする活用か、その辺の違いはもちろんあつての言葉遣いだと思いますけれど。どうでしょうか。皆さん、どう思いますか。

―原子力の平和利用は可能だったのでしょうか？

渡辺：平和利用というのはあり得ると思うんですけど、やっぱり使わないほうがいいですか、原子力は。ただ、今度の事故も人為的な事故とはいけど、100パーセント人為ではないと思うのね。だから、こういう自然災害から起こる事故というのも考えておかなきゃならないわけですよ。それをちょっと東電側は甘く見てたっていうのは確かなんですね。安易に考えてたっていうか、それ以上の自然災害が来たということだよ。で、結果を受けたのは私たちですから。

これは形の上だけではないですよ、この被害は。もう精神的なものが。確かに金銭的には補償されましたよ。うらやましがられてもいますよね。でも、それだけで人間はいいかということ、そうでない心のいら立たしさとか。というのは、さっき観音講が言ったように、昔ならこんなふうに貧しいけれども仲良く隣土士の助け合いで平和に生活できたよと。だけど、ここに今は住めないんですから。人間が住めないような場所をつくるのは、やっぱりこれは考えものですよ。だから、それを安全だ安全だって、安全神話とよく言いますが、だけどそこまでだまされたっていう思いもありますね。

ただ、本当にむなしいですね。隣近所がもうこれだけに。昔の姿がなくなっちゃったっていうのは。もう一変してんですよ、この大川原って所は。それで大熊町というのは東電一色なんですよ。東電もそれなりに私たちの生活を保障してくれようなことはやってくれますけどね。でも、ここに住んでた人の気持ちまでは救われない部分があるということも確かですね。

まあ老人だからそう思うんでしょうね。今の若い人たちは喜んでる人も・・・。こんな田舎でなんの楽

しみもない所に住むならもっと都会で今流の生活できるんですもの。安心してね。それから、各家庭っていうか、各家族っちゃうか、お嫁さん同士でなくて、自分は主婦として家族を構成できる。それで年寄りも年寄りで別の所に住んで。そういうふうな家族構成になってるしね。だから、新しいうちを建てるある人が、若夫婦だけの生活できる場しか確保しないでうちを建てちゃったと。私はもうそこには住めないからアパート借りて別の所に住んでとかいう人も聞くんですよね。だから、細かい見えない部分でいろいろひずみはあるんじゃないでしょうか。

一原子力発電所の建設に対して反対運動をされていた方について教えてください。

渡辺：直接（の関わり）はありません。というのは、うちでは公職に就いてたんですね。議会の何期かやってたかな。だから、体制側としては原発反対だなんていうことは言えないですよ。そういうふうな者と一緒に私が原発反対なんてしたら家庭崩壊ですよ。だから結局は、私自身も東電あっての大熊かもしれないなという面も多々見てるから、だから反対まではいかなかったですけどね。だから、反対の中のサークルに入るといことはしなかったですし・・・。

私は教員だから、労組にも入ってましたけれど、労組のストライキなんかやるときはやっぱり躊躇しましたけど。まあストライキにも加わりましたけどね。そう、そういう立場もあります。人それぞれには立場つつうのありますもんね。人のせいにはしたくないんですが。

今でも帰りたいけど帰れないっていう。「子育て中だから、どこに危険なものが潜んでるか分からない。子どもの将来を考えるとここには帰れないのよ」と、こういう運動起こしてる人いますよね。そういう人は何人か知ってますし、この前、（観音講の）集会にも出てます。何かそういうはっきりしたテーマを書いて集会をやったんでなくて、行ってみたらそんな話だったっちゃう話ですね。

一体制側の立場からは、原発に反対することは難しかったということですか？

渡辺：難しいですね。ここでは難しい。よそではできると思います、浪江とかでは。大熊ではできないような雰囲気でしたね、あんまり。だと思えますよ。賠償されてからはなおのこと大っぴらに原発を悪くっていうか、悪く口で言うことはしないと思えますね。よそよりは少ないと思えますよ。というのは、生活が保障されてるからね。なんつったって生活が一番ですもんね、人は。主義主張できるのは若い単身ならできるけど、子どもがいたり、家庭があれば、しがらみがありますもんね。

一原子力発電所の建設に関する住民投票の有無について教えてください。

渡辺：ないんじゃないかな。（住民投票を）した記憶はないね。そんなに重大に考えてたのかな、町は。分らんけどね。ともかくあの広大な原発の条件がそろった場所というのはあったから。あそこは昔は飛行機の訓練の場所だったのかな。だから、そういう意味だと、岩盤でもあるし、そういう条件的にそろってる所がそういう大会社が利用してくれるというのは町にとっては大きな話じゃなかったのかな。だから、町民はあんまり、今みたいには意識があるわけでもないし、どの程度の危険なものかも分からなかったし、だから、住民投票なしで入ると思いますがね。私の記憶にはないんですけど。だからこそ

(原子力発電所は) 何十基も日本では造られたんでしょ。どんどん造られたんですよ。これは第 1 号ですけどね、福島県の。

―震災を経験していない世代に震災を伝えるときに何を伝えていきたいですか？

渡辺：いろいろな意味で震災というのは自分ではどうにもならないこと。

(私は) 津波には遭わなかったからね。ただ揺れただけですし、そして原発ですよ。原発があったが故に避難ですよ。この家は江戸末期の家なんです、この家は柔な家なんです、これも倒れなかったんですよ。リフォームすればこうやって人が住めるわけですからね。だから、震災による災害については、今、あんまり地震がなってもそれほど、怖いのは怖いんですけど、逃げなきゃなんないって思いはないですけどね。

何でしょうね、震災によって教訓して皆さんに伝えたいことっていうのは。ともかくいつ起こるか分からないですよ。それだけの不安はありますね。そして、避難ということは、生活するには全然不便を感じなかったのですよ。日常の飲み食いは。というのは、すぐ住宅も斡旋してもらいましたし。県でね。県から無料で家賃を払ってもらい、食費も十分に、困った困ったって状態はなかったんですよ。だから、かえって、観光地に避難しましたから、あっちこっち旅行したりして。こんなこと言っちゃ不謹慎なんだけど、いろいろな人生経験しました。だから、皆さん若い人たちに言えることってないね、悪いけど。

だけど、やっぱりそういうふうには避難したからって大げさに被害者ぶる必要ないなっちゃうこと。(避難中に迷いに迷ったけれども) ともかく前向きで生きるとはとても大切なことだと私は思っています。何でもマイナスに取らないで。さっきから原発のむなしさを訴えてますが、それは別です。何て答えたらいいでしょうね。いろいろな経験をさせてもらったというプラス面と、あとはそういうふうな、古里を離れたという、流浪の民ではないけど、足が着かない、毎日旅行してるような浮いた生活、浮草的な生活、これを両方体験しましたんで。何て言ったらいいんだろうな、分からんな。

―もし、また通子さんが教員として教壇に立つとなったとき

震災を経験してない子どもにどういったことを伝えたいですか。

渡辺：震災でも、いろいろな災害というのはいつ来るか分からない、そういうことを絶対に忘れちゃいけない、それを言いたいです。人知を超えてる、そういうことです。

また、被害を被ったときにはそういう体験をプラスに生かしていくという生き方を学ばなきゃなんない、そう教えたいですね。負けないというか、震災も前向きに、マイナスに取らずに受け止めていけるような生き方をしなきゃなんないよということですね。まあ若い人だから負けないでしょうけど。年寄りですえ負けないんだから。

私は帰るぞと最初に思ってたですから。私は誰がなんと言おうと(大熊に) 帰ると思ってて、それを待つだけの話ということで。そんな自分の考えを持つということでしょうね。負けない生き方をするにはね。

津波だったら「まず命を」って言うけど、命は大丈夫だったんです、私ら。ただ、放射能の被害がどの程度のものか分からないから、これは大変だ。目に見えないものに脅かされてるというような経験です

ね。ほんでもやっぱり原子力とか、放射線とか、そういうのは知らないですもんね、まだ。知らなきゃなんないんだけどね。皆さんご存じですか、放射能と放射線とどう違いますかとかって。これはやっぱり私たちここに帰ってきて、日常食べるものにどんなふうな影響があるかというのは考えなきゃなんないわけですよ。そうすると、行政っていうのは今回はいろいろな意味で私たちを守ってくれるんだなっていうのも実感です。何でも検査する、何でも相談に乗ってくれるというような感じですからね。行政も真剣にいろんなこと考えたんでしょうね、対応。でも、いつの間にか忘れるかもしれないけど。

※掲載情報は 2023 年 12 月現在のものです。